

みなさんへのメッセージ

障がいのアナ 代表 小川優より



藤沢のまちに蒔いた「小さなタネ」が、一年を経て、力強く瑞々しい物語を紡いでくれました。

本プロジェクトの歩みをまとめたこの冊子、そして次年度の活動は、クラウドファンディングを通じて寄せられた多くの皆様の温かなご支援によって支えられています。心より感謝申し上げます。

皆様に支えられ、一期生となる五人の学生たちは私の想像を遥かに超えて逞しく成長しました。その姿は「美しく花ひらく」というよりも、ぐんぐんたく育ち、緑輝く『ジャックと豆の木』のようでした。彼らの記事を読んでいただければ、そこに福祉への「素直な対峙」があることに気づくはずですよ。

福祉という分野は、なぜか美談で語られがちです。美しい言葉が決して悪いわけではありませんが、人として向き合う前に、用意された「きれいな答え」が邪魔をし、一定の距離が生まれてしまいます。これも私たちがアナをあけたい社会の壁です。

学生たちは、大人がまるで禁句のように飲み込んでしまう「知らない」「驚いた」「思っていたのと違う」という感情を真っ直ぐに綴りました。彼らの記事を読むと、読者もまた「福祉に出会う」という本質に触れるとともに、誰もが自分の素直な言葉を紡いで良いのだと、心が解放される感覚を覚えるのではないのでしょうか。

このプロジェクトは、将来の福祉職を増やすことが目的ではありません。彼らがここでの経験を土台に、福祉以外の広い世界へ飛び立つことで、あらゆる分野から社会を柔らかくする動きが生まれてきます。その大きなムーブメントこそが、多くの人々が真に生きやすい社会を創る起点になると信じています。

そのためにも、学生が現場へ通い対話する機会を、まちの中に「循環するシステム」として定着させていきたい。学生を受け入れてくださる福祉現場の方々、そして学生を送り出してくれる学校。このつながりが、社会の壁にアナをあける確かな行動になります。

「ふじさわこたね」が大きく育つ豆の木なら、地域のあらゆる活動は彼らを育む大地であり、光です。きれいな言葉で遠ざかるのではなく、少しザラッとすることがあっても、当たり前に行き来し、ともに生きられる藤沢市を皆様と一緒につくっていききたいです。

ふじさわこたね 学生リーダー 野元小暖より



本冊子を手にとっていただき、誠にありがとうございます。私はインターン生としての活動を経て、現在は学生リーダーとして「ふじさわこたね」に携わっています。

ふじさわこたねプロジェクトでは、福祉や地域の現場に足を運び、多くの気づきを得ました。そして地域の皆様には、この1年、取材の受入やクラウドファンディングなど、様々な形で温かいご支援を頂きました。改めてお礼申し上げます。

取材を通して、特に印象に残っているのは、同じ目的を持って活動していても、一人ひとりが抱く想いや大切にしている価値観、思い描く未来は異なるということです。その多様さこそが、地域の豊かさにもつながっていると感じました。

また、その多様さは学生ライターの中にも表れています。同じ場所を取材しても、同じ言葉が生まれることはありません。学生一人ひとりの体験や、その時の心の動きが、その人だけの言葉となってアナレターに綴られています。

時には、思うように言語化できず、悩んだ学生も少なくありません。私自身も、新しい発見や心が動いた瞬間にぴったりフィットする言葉が見つからず、もどかしさを感じました。しかし、その葛藤や迷いもまた、実際に足を運び、真剣に向き合ったからこそ生まれたものだと思います。

情報があふれる時代だからこそ、自分の足で行き、自分の心で感じた体験は、これからの私たちの土台になっていきます。そして、学生目線のアナレターが、地域の皆様にとって新たな「気づきのたね」となれば幸いです。

最後になりますが、私たちの活動を支えてくださる全ての皆様に感謝を込めて。これからも「ふじさわこたね」の成長を一緒に見守っていただけたら嬉しいです。



神奈川県 1年
佐藤 晴
さとう はる



障がいのアナでの活動を通して、相手を「支える存在」ではなく「対等な一人の人」として向き合う意識が芽生えた。自分の当たり前を疑い、多様な価値観を受け入れながら、社会の壁に気づけるようになった。

記事を書くときのお供は？

お風呂に入る。行き詰まったときはお風呂で考えてた。

大ピンチエピソードを教えて！

ラーメン屋でバイトをしてご飯を炊くときに急いで作業してたら、ご飯を何合入れたか忘れて目分量で水を入れたこと。ちょっと硬い米になったけどギリギリセーフだった。

もし「100万円」もらったら何に使う？

バックパッカーで世界一周したい。

高校1年生

福田 健太
ふくだ けんた

今まで福祉の世界やボランティアの世界は何も知らなかったのですが、実際に関わることによって、もっと身近に存在するものだと実感できました。

私の「推し」！今、熱中していること

ここ最近将棋が好きで、ずっと指してます。

実は私、ここが弱点です

最近少し克服してきましたが、お茶が苦手です。

もし「100万円」もらったら何に使う？

100万円使い切るくらいの、本格的な将棋盤と駒が欲しいです。

第1期 ふじさわこたね メンバー紹介！

こたねに入って、自分が「変わった」思うこと、
その他にも色々な質問に答えてもらいました

湘南学園高等学校 1年

飯島 咲音
いいじま さのん

こたねでの活動を通して、初対面の人に話しかける抵抗感がかなり無くなりました。今まではなんとなくかなだろうと思って話しかけるのを避けていましたが、取材活動が増えてこんな記事を書くにはこんな人の意見が欲しいな、じゃあ話しかけてみるぞ！と、前より自分の意思に揺らぎがない状態で話しかけられるようになりました。

実は私、ここが弱点です

ずっと聞いたりすること。ディスカッションとかでも自分の時間が来るまでのおしゃべりと戦っています...

もし「100万円」もらったら何に使う？

友達とディズニーお泊まり！友達とのお泊りにかなり憧れがあるのでしてみたいです！そして、食欲のままにディズニーで食べ飲みしてみたい。

私の「MBTI」と、それっぽいエピソード

MBTI：主人公。おせっかいになりがちです...。チーム作業の時など、これは大丈夫？あれは大丈夫？と確認しまくったりしちゃう。



高校3年生

野元 小暖
のもと こはる

私は取材を通して、地域に対する見方が少しずつ変わっていったと思います。さまざまな方々の想いや活動に触れる中で、多くの温かな想いに支えられている地域だと気づき、私もその一員として地域に関わっていきたいと思うようになりました。

記事を書くときのお供は？

アイスクリーム！休憩時に食べます！

私の「推し」！（今、熱中していること）

世界各地のマグネットを集めること！

もし「100万円」もらったら何に使う？

飛行機（できれば JAL か ANA）のファーストクラスに乗って海外旅行に行く！



湘南一ツ星高等学院 2年

小島 若菜
こじま わかな

ふじさわこたねに入って、色々なところで取材し、記事を書く経験を重ねていくうちに、前より文章力がついたと感じました。また、記事を書くことの楽しさも知ることができました。もともと私は話すのが苦手でしたが色々な方と話す機会が多いので、コミュニケーション力もあがったと思います。

取材の必須アイテム

メモ帳。気づいたことなどすぐ書きたいから。

私の「推し」！今、熱中していること

本（小説）！家にいる時によく読んでいて、最近ハマってます。

私の「MBTI」と、それっぽいエピソード

MBTI：提唱者（infj）完璧主義と真面目なところで、決めたことは最後まで頑張るところです。



さまざまな施設やお店、 イベントで、取材を させていただきました

ふじさわこたねの記事は
「アナレポ」として発信中



お引き受けいただいたみなさまに、心から感謝申し上げます。
取材先は本当にすてきな場所ばかり。

- 藤沢市点字図書館
- ユニバーサル農園
- ココロまち診療所
- Nico's Kitchen
- コトママ holiDay
- えとす児童クラブ
- Terrace-TiPi
- 遊びりパークリノア
- 駅前かぐや
- ふじさわ子ども・若者委員会
- 湘南やさしい日本語プロジェクト
- 夏休み！ふくし体験教室
- おれんじフェス
- 東京 2025 デフリンピックを藤沢から応援しよう！
- FUJISAWA SPORTS FESTIVAL
- 藤沢ふれあいフェスタ
- ユニティ・ニューイヤーナルトマルシェ


こたね
パートナ
ー


右の地図には取材先（拠点があるところのみ）のWEBサイトやInstagramなどのQRコードも載せているので、詳しく知りたいという方はチェックしてみてください！


本冊子では、学生たちに特に印象に残っている取材を2つ選んでもらい、それらを掲載していきます。5人はどんな福祉と出会ったのでしょうか？ゆっくりとご覧ください。


なお、サイトでは、学生たちのすべての取材記事をご覧いただけます。


藤
沢
市
M
A
P

 ココロまち診療所
藤沢市用田 2 6 7


 えとす児童クラブ
藤沢市天神町 2-6-3


 ユニバーサル農園
藤沢市瀬郷 1008-1

 駅前かぐや
藤沢市善行 1-5-2

 Nico's Kitchen
藤沢市大鋸 1-9-2
玉樹ビル 1F

 コトママ holiDay

 遊びりパークリノア（辻堂）
藤沢市辻堂西海岸 2-10-3

 Terrace-TiPi
（テラスティピー）
藤沢市鵜沼橋 1-7-2-5

記事をピックアップ紹介

つづく

はじめて触れた「点字の世界」 —見えないことを「知る」体験を通して

取材：福田 健太

8月7日（木）、藤沢市総合市民図書館で行われた「みて！きいて！さわって！」に参加しました。初めての取材で緊張しながら会場に向かいましたが、入ってみると文化祭のような明るい雰囲気に驚きました。

これまで点字や視覚障がいに関わるイベントに参加したことがなかった僕にとって、新しい世界と出会う時間になりました。この取材を通して得た発見と学びを報告します。

イベントの紹介

僕は10時から15時までイベントに参加し、隅々までブースを回りました。会場には、点字の絵本コーナー、盲導犬のお話、そして視覚補助機器の体験コーナーなどがありました。

最初に体験したのは「点字の絵本」のコーナーでした。その後、盲導犬のデモンストレーションを見学しました。

とくに印象的だったのは、点字を打つ機械「パーキンスブレイラー」に触れたことです。

アメリカで作られたタイプライターのような機械で、手に取ってみると想像以上に重く、持ち運ぶのは大変だと感じました。

自分には馴染みのないこの機械を、点字を使う方の多くが持っている聞いて驚きました。この機械が「書く」を支える重要な道具なのだを知り、こんなにも知らない世界があるのだと実感しました。

「見え方」の多様性

会場を回る中で、僕の考えが大きく変わったのが、「見え方」の多様性を知った体験です。

印象に残ったブースの一つは、本を置くと背景の色と文字の色を変えられる機械が設置されていました。この機械を使って体験すると、同じ文字でも、背景を黒にするか黄色にするかによって、



見えやすさが大きく変わることがわかりました。

人によっては黒が見にくく、赤が見やすいなど、見え方が一人ひとり違うということを、その場で体験できました。

「見えにくさ」といっても決して一つではなく、人によって感じ方や必要なサポートが違うのだということを実感しました。

点字図書の工夫

点字の絵本は、普通の本をもとにして作られています。しかし、そのまま点字を打ったり、挿絵の線を凸凹にするのではなく、一冊一冊「読みやすさへの工夫」がされていることに気がつきました。文章のレイアウトを変えたり、絵が重なっているところをバラバラするなどです。

機械的に翻訳するのではなく、人が丁寧に気配りをしながら調整しているのがわかり、すごく良いなと思いました。

また、点字の本は普通の本と比べると何倍も厚く、重くなることも知り、改めて驚きました。点字の本がどれほどの手間や熱意をかけて作られているのかを肌で感じることができました。

安堵感と充実感

今回のイベントを通して、僕はそれまでまったく知らなかった世界に一步近づけたという達成感が大きかったです。

図書館を出たときには、肩の荷が下りたような安堵感と、新しい知識を得た充実感が同時にありました。会場ですぐに理解するのが難しい部分もありましたが、帰宅してから自分で調べたりしていると、「知らない」が「知る」に変化していく楽しさを感じました。

この経験を通して、点字や視覚障がいの福祉について、もっと多くの人にも知ってもらいたいと強く感じました。僕が感じた驚きや学びを、今後の活動を通じて伝えていきたいと思っています。





「ユニバーサル農園」を体験！ かわうそ農園で知った心地よい距離感

取材：福田 健太

高校で農業の授業を受けているので、「ユニバーサル農園」という名前に興味を持ち、8月19日(火)に瀬郷にあるユニバーサル農園(かわうそ農園)に行ってみました。



この日は、とても広くのどかな農園で、ワイン用のブドウの剪定を体験しました。ものすごく暑くて汗だくになりました。「こんなに暑くても、みなさん、日々作業しているんだな」と驚きました。

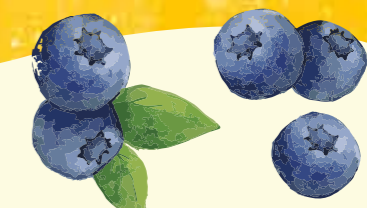


ユニバーサル農園で見つけた 本当の「ユニバーサル」

ユニバーサル農園とは、「障がいの有無や世代を超えた多様な人が、農業体験を通じて社会に参加できる場所」として、神奈川県が進めている取り組みです。

ただ野菜を育てるだけでなく、誰もが支え合い、交流することを目的とした農園です。事前に、言葉の意味は調べていきましたが、作業をしている間、その答えはすぐにはピンときませんでした。

しかし、参加者のみなさんと一緒に黙々と作業を進めていく中で、あることに気がつきました。それは、「この人は障がいのある方だ」と、まったく意識しなかったことです。



農園の中では、誰もが自分の作業に集中していて、お互いに適度な距離感を保ちながら触れ合っている空間でした。

自然な関わりが生む心地よさ

僕が知りたかった「ユニバーサル」の答えは、特別な「配慮」や「支援」をすることではなく、「障がいのあるなしに関わらず」、誰もが自然に、安心して自分のペースで作業ができる、居心地のよい空間そのものだと体験してわかりました。特別な意識をしなくても、それぞれの人が尊重し合っていてそこに居る。まさにこの農園が、自然な形で「ともに生きる社会」を実現しているのだと感じました。

また行きたい

今回の取材はとても疲れたけれど、「また行きたいな」と強く思いました。

周りを見回しても田んぼや畑。こんなに広く、あたり一面が農園になっている空間は初めてでした。そして、そこで作業をしていると心がとても落ち着きました。和気藹々としているけれど、適度な距離感があるからこそ、安心してその空間にいられるのだと感じました。初めてなのに、心落ち着ける居心地のよい場所でした。

スケールが大きくて雰囲気の良いこの農園で、自然な形の「ユニバーサル」を体験できたことが嬉しいです。次も、農園でのイベントがあれば、ぜひ参加したいです。



善行駅からすぐ近くにある 温かいオシャレカフェ



取材：小島 若菜

10月24日（金）、善行駅西口より徒歩1分のところにある「駅前かぐや」の取材に行きました。

障がいのある方が働いている場所に興味があったのと、「金曜日はカフェをやっているよ」と教えていただき、楽しそうだなと思って取材させていただきました。

「駅前かぐや」ってどんな場所？

駅前かぐやとは、「地域で働く機会を通じて自立していくこと」をサポートするとともに、「多様な個人の成長を後押しする地域社会づくり」を目指している事業所です。地域との接点づくりや、顔の見える関係性の構築を大切にしています。

かぐやのカフェは、金・土曜日の11:00～15:30に営業しています。お店の居心地がよくて、いただいたコーヒーが本当に美味しかったです。

この日は、午前中にカフェで働いている方々に取材をしました。スタッフさんとお話しながら、実際にカフェのお手伝いも体験させていただきました。最初はすごく緊張していましたが、皆さんが優しく声を掛けてくださったので、自然と笑顔になりました。

皆さんにインタビュー

この日、カフェで働いている方々にインタビューをしました。やっていて楽しいことを伺うと、「いろいろすごく楽しい。とくにコーヒーをつくるのが楽しいです」「仲間がいるのが楽しいです」と、笑顔で教えてくれました。

取材をしていく中で、公民館でワークショップをするなど楽しいイベントがあることも知りました。「みんなで協力できたことで、チームワークを感じました」とも話してくださいました。所長の澤野亮介さんに、どうしてこの場所を立ち上げたのか伺うと、「さんわーかぐやには、元々、別の拠点（通称：竹林かぐや）があって、そこは『生活の基礎』の場所でした。そこか



らのステップアップの場所になればいいと思います、第二の拠点として、駅前かぐやが設立されました」と教えてくれました。

大切にしていることは、「みんなが安心して過ごせる『居場所』を土台に、地域の中で自然に関われる『出場所』をつくっています。仕事でもボランティア活動でも、安心して挑戦できる環境の中で、『誰かの役に立っている』という実感が、少しずつ自分自身への自信につながってほしいなと思っています」と語ってくださいました。

自分が感じたこと

スタッフの方々や働いている方々と、将来の夢や趣味、駅前かぐやのことを話して本当に楽しかったです。私は不登校の経験があるので、働いている方々が悩んでいることや趣味の話に共感し、嬉しい気持ちになりました。

人と話すことが苦手で、取材の時に沈黙してしまうときがあったのですが、「沈黙平気ですよ。大丈夫です」「自分が気になったことを話してね」などと言ってくださり、温かく優しい人達で、私もすごく救われた場所でした。

私は心理士になりたいという夢があるのですが、スタッフさんや働いている方々に自分の夢を話したら、「わかちゃん向いてるよ」「心理士になって話を聞いて欲しい」など嬉しい言葉をもらいました。自分の夢に自信を持ち、これからも頑張ろうという気持ちになりました。カフェにまた行きたいと思いました。

まとめ

駅前かぐやは、「不登校、引きこもり、孤立している人」など悩みがある人たちが人と関わり、つながりを応援する、地域に出る一歩の練習になる素敵な場所だと感じました。働いている方々の話に共感しましたし、この場所をきっかけに前向きになれて、救われている人たちがたくさんいると感じました。皆さんと趣味や将来の夢を話したことがとても楽しかったです。私自身、貴重な経験になりました。

カフェのコーヒーは、お向かいにある豆の専門店「あんだんて」さんで焙煎された豆を使用しています。「善行ブレンド」と「悪行ブレンド」があり、居心地がいいお店です。素敵なスタッフさんや働いている方々に会ってみてください。ぜひ皆さん来てください。





ニコズキッチンさん取材して — 働く人の笑顔から感じた、あたたかい場所

取材：小島 若菜

9月19日（金）大鋸にあるニコズキッチンへ取材に行きました。お店に入ると、おしゃれな雰囲気とやさしい空気が伝わってきて、居心地の良さを感じました。ニコズキッチンに取材に行こうと思ったきっかけは、障がいのある人が働いている場所を実際に見てみたいと思ったからです。実際に取材をしてみて、一生懸命仕事と向き合う姿を見て、私も頑張っていきたいと思いました。



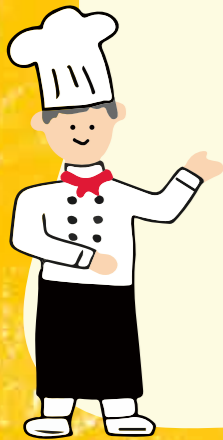
はじめてのニコズキッチン

ニコズキッチンは、就労継続支援B型事業の施設で、さまざまな障がいのある方たちが働いている場所です。藤沢駅から徒歩10分くらいで、月曜日から金曜日の11時～14時までさまざまな活動を行っています。ニコズキッチンでは定食を提供しており、藤沢市役所ではお弁当の販売も実施しています。本庁舎は金曜日、分庁舎は火曜日で、どちらも11時から販売開始、売り切れ次第終了です。

取材当日は金曜日だったので、午前は市役所でお弁当販売をしている皆さんと一緒にお手伝い、午後はニコズキッチンで軽作業を見学しました。軽作業では、ボールづくりやCDの袋づめ、時計のパーツ組みなど、それぞれが得意な作業に取り組んでいました。なかには、車いすで働いている人もいました。

小木曾さんへの取材

代表の小木曾まこさんにお話を伺いました。小木曾さんは「私の子どもは知的と身体の障がいを持っていて、車いすで生活しています。養護学校の高等部のとき、カフェの実習に行き『私もカフェで働きたい』と言っていたのですが、実習先から『車いすでは難しい』と言われました。それなら、自分でつくろうと思って立ち上げたのがニコズキッチンなんです」と話してくれました。その話を聞いて、私は本当にすごいと思いました。お店の名前の由来について聞くと、「“ニコ”というのは“笑顔”という意味。みんなが笑顔になれる場所になったらいいなと思って」と、にこやかに教えてくれました。取材を通して、障がいのある方が働くことの素晴らしさを感じました。小木曾さんは「障がい



のある人は年金があって生活はできるけれど、自分で働いて、お給料をもらえるのはすごく嬉しいこと。そのお金で好きなものを買う目標もできるし、自分が社会や誰かの役に立っているとも思える。それって本当に大事なこと。いつもは助けられる立場が多いけれど、働いているときは誰かのためになれるというのは、とても幸せなことだと思う」と語ってくれました。

働いている方への取材

パソコンでメニュー表をつくっているメンバーの方にお話を聞くと、「ニコズキッチンは自分がやりたい仕事ができる楽しい場所」と、笑顔で話してくれました。

ほかのメンバーの方々にも話を聞くと、「ニコズキッチンは楽しい」「販売などいろいろな活動をしていて、全部楽しい」「フェルトボールづくりとお米とぎが楽しい」と、みんな笑顔で教えてくれました。

さらに、みんなを支えている職員の方にもお話を伺うと、「みんなと接するのが楽しい」と、同じように笑顔で話していました。

取材を通して、働く人も支える人も、みんなが笑顔で「楽しい」と言っていたのが印象的でした。ニコズキッチンは、笑顔が繋がっていく本当に素敵な場所だと感じました。

仕事を楽しむ力

ニコズキッチン取材して、とても温かく、みんなが笑顔で楽しそうに働いている素敵な場所だと感じました。

働いている方たちの姿を見ているうちに、私の弟のことを思い出しました。弟はダウン症で、まだ小学生ですが、「こんなふう将来働けるんだ」と思うと嬉しい気持ちになりました。



一生懸命に作業している姿や、笑顔で話す様子を見て、仕事を楽しむことの大切さを教えてもらいました。将来、自分が関わる仕事のなかでも、笑顔を大切にできるようになりたいです。この記事を読んで、ニコズキッチンのあたたかさや、働く人たちの笑顔を知ってもらえたら嬉しいです。



盲目のシンガーソングライター 栗山龍太さんと学んだ「つながり合う力」

取材：佐藤 晴

8月6日（水）、秩父宮記念体育館で「夏休み！ふくし体験教室」が開催されました。参加したのは小学生8人と、中学生から大学生までのボランティア6人。夏休みの特別な一日、子どもたちは「福祉」を体験し、障がいと共生について考える時間を過ごしました。



栗山龍太さんの生き方

ゲストとして登場したのは、盲目のシンガーソングライター・栗山龍太さん。小学5年生のときに病気で視力を失った栗山さんは、現在、音楽活動を続けながら盲学校で鍼灸マッサージを指導しています。

鍼灸マッサージを教えている理由について「自分ひとりの力でできるから」と語ります。子どもころから水泳や柔道など“一人で完結できるもの”に打ち込み、自らの力を信じて積み重ねてきた経験は、その後の生き方にもつながっているようです。

講演では、盲目だからこそ体験した出来事をユーモアたっぷりに語ってくれました。「大変そうだと思うのがちがけれど、角度を変えれば楽しいこともいっぱいあるんです」との言葉に、子どもたちはときに笑い、ときに驚きながら耳を傾けました。そして栗山さんは「盲目の自分にしか伝えられないことがある」と強調しました。見えない世界で感じる事、障がいを持つからこそ気づけること。それを言葉と音楽で伝えることが、自分の役割だと信じて活動しているのです。

補い合うことが力になる

続いて行われたのは、視覚障がい者スポーツ「ゴールボール」の体験。参加者はアイマスクを着け、鈴の入ったボールを音で探りながらゴールを狙います。最初は「何も見えなくて怖い」と口にしていた子どもたちも、仲間の声やボールの音に耳を澄ませるうちに少しずつ感覚に慣れていきました。試合が進むにつれて笑顔が増え、「楽しかった！」という声が会場に響きます。

視覚を奪われる体験を通じて、子どもたちは“見えなくてもできることがある”仲間と補い合うことが力になる”と実感できたようでした。

印象的だったのは、会場にいた赤ちゃんに栗山さ



んが優しく触れた瞬間です。見えなくても、赤ちゃんに向ける笑顔や仕草はとても穏やかで、見ていた私の心に強く残りました。その姿は、「相手を思いやる気持ちは見える・見えないを超えて伝わる」という事実を静かに教えてくれていました。

アイスル魔法

プログラムの締めくくりは、栗山さんの代表曲「アイスル魔法」。

「僕らの世界はまるでジグソーパズルみたい」

「誰にも必ず居場所があり、君にも僕にも役割がある」

歌詞に込められたメッセージは、講演やゴールボール体験と自然に重なっていました。人は一人ひとりが大切なピースであり、欠けてはならない存在です。そして「僕らはいつでもそうみんなで補い合ってる」という言葉は、まさに参加者が体験を通して学んだことそのものでした。

さらに「君がいるから広がるよイマジネーション」というフレーズは、健常者と障がい者が共に歩むことで、新しい発想や楽しさが生まれることを示しています。栗山さんが目指すのは、障がいを特別視せずに「福祉をもっと身近に」感じられる社会。そして健常者と障がい者が対等に「つながり合う社会」です。音楽と語りを通じて、その未来への願いを会場の子もたちに託したように思えました。

社会を温かくする一歩

最後に栗山さんは「少し余裕があったら、街で困っている人に声をかけてみてください」と呼びかけました。重たい荷物を持つ人、道に迷っている人、そして障がいを持つ人。ちょっとした勇気で手を差し伸べることが、社会を温かく変える最初の一歩になるのです。

「夏休み！ふくし体験教室」は、福祉を学ぶ機会であると同時に、「違いを認め合い、つながることで生まれる豊かさ」を実感できる時間となりました。子どもたちがこの日感じた驚きや楽しさが、日常の中で「誰かを思いやる行動」へとつながっていくことを願っています。



笑顔が広がる在宅医療

—ココロまち診療所を見た地域と人をつなぐ力

取材：佐藤 晴

8月25日（月）、今回取材したのは、ココロまち診療所の院長で在宅医の片岡侑史さん。

診療所は自然に囲まれ、築70年の古民家をリフォームした建物で、病院というよりも地域の人々がふらりと立ち寄りたくなる温かな雰囲気を持っています。

まるで病院らしさを忘れさせ、誰もが安心して足を運べる居場所のようでした。さらに地域の人たちがつながりを持つよう、さまざまなイベントも行われているそうです。

近々予定されていたのは流しそうめんのイベント。片岡さんはその準備として自ら竹を切り、土台を作っていました。診療だけでなく、地域の人たちが笑顔で集える場所を自分の手でつくろうとする片岡さんの姿勢に心を打たれました。

地域の暮らしに寄り添う医療

午前9時、私も同行させてもらい、いよいよ訪問診療が始まります。この日は午前中に5件、午後には7件、合計12件と特に多い日だそうです。患者さんの年齢は20代から96歳まで幅広く、症状も人によってさまざま。移動の合間に片岡さんから患者さんの状況や訪問の目的などを聞きながら、次々と向かうお宅を訪れました。実際に見学してみると、訪問医療が想像以上にハードな仕事だとわかりました。車での移動、診察、記録、次の訪問先へ移動…それを繰り返すだけでも体力を消耗します。それに加えて、患者さんや家族に安心してもらえるよう、常に気を配り続ける必要があります。片岡さんや看護師さんの体力と集中力のすごさに驚きました。

しかし、どの患者さんに対しても片岡さんと看護師さんは必ず笑顔で接し、声のトーンや話し方を変え、その人に合った雰囲気をつくりながら診察を始めます。診察の場面の中で、家の中に笑い声が広がることも多くありました。片岡さんは診察の最後には患者さんの手を握り、しっかり目を見て「また来るね」と言葉をかける。医療行為が行われている場でありながら、そこにはどこか温かい空気が流れていて、見ている私まで安心感が伝わってきました。



片岡さんが大切にしていること

なぜ片岡さんの診察にはこんなにも温かさがあるのか。その理由を尋ねると、「体だけでなく、心も健康になってほしい」と片岡さんは語ります。だからこそ診察の中で生まれる笑いを大切に、患者さんだけでなく家族や介護者の心にも寄り添おうとするのだそうです。

「コミュニケーションは技術」と片岡さんは続けます。患者さん一人ひとりの状況や性格、家庭環境に合わせて伝え方や関わり方を変える。医療の専門知識だけでなく、対話や関係づくりの力がなければ在宅医療は成り立たないのだと話してくれました。実際、家族や介護者が抱える不安を和らげることも片岡さんの診察の大切な役割の一つです。

さらに在宅医療は教科書通りにはいかないことが多く、予想外の状況に対応するためには豊富な経験と柔軟な発想が求められます。片岡さんは「同じ障がいがあっても、人によって困っていることはまったく違う。その人に合わせた福祉を提供することが本当に必要だ。」と語ります。その言葉には、一人ひとりの人生を尊重し、その人らしい暮らしを守りたいという強い思いが込められていました。

一日を通して見えた在宅医療の本質

一日同行してみて、在宅医療が想像以上に過酷であることを実感しました。体力的にも精神的にも大きな負担がかかる仕事です。しかし片岡さんや看護師さんはただ病気を診るのではなく、患者さんが「また来てほしいな」と思えるような診察を心がけ、治療そのものよりも患者さんの幸せな暮らしを第一に考えていました。

その姿を間近で見ると、医療は命を救うだけのものではなく、人が安心してその人らしく生きるための営みなのだと強く感じました。患者さんだけでなく家族や介護者も含めて、暮らし全体を支えるのが在宅医療の役割なのだと思います。

訪問先で交わされる何気ない会話や笑顔の一つひとつに、片岡さんの思いが込められていました。その積み重ねが患者さんの人生を支え、地域の中に温かなつながりを生み出しているのです。在宅医療の現場は決して特別なものではなく、人が人らしく生きるための当たり前の営みの延長線上にある。片岡さんの一日を見学して、私はそのことを深く心に刻みました。



会って気づく、犬の力

取材：飯島 咲音

今回は、カフェ「テラスティピィ」に取材へ行きました。ここは元介助犬のわんちゃんが看板犬として過ごしている、少し特別な空間です。

入口のドアを開けると、2匹のわんちゃんが駆け寄ってきて、まるで「おかえり！」と言うように迎えてくれました。

店内では、わんちゃんをそっと撫でる人や、お客さん同士が自然に会話を楽しむ姿、穏やかに過ごす人たちの姿が見られました。

初めて訪れた人でもすぐにリラックスできる、温かく落ち着いた空気が流れるカフェだと感じました。



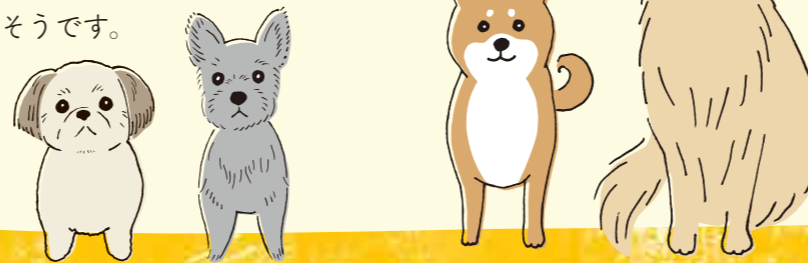
犬と過ごす優しい時間

テラスティピィは、元介助犬のわんちゃんたちが看板犬として迎えてくれる、温かみ溢れるカフェです。店内は木の温もりを随所に感じられる落ち着いた空間で、ナチュラルな色合いのインテリアと柔らかい照明が組み合わさり、初めて訪れた人でもすぐにリラックスできます。

わんちゃんたちは、それぞれ思い思いの場所で休んだり、お客さんと遊んだりしており、その穏やかな様子が店全体の心地よさを引き立てていました。このカフェでは、くつろぎの提供だけでなく、介助犬やお仕事をしてきた犬たちの役割を広める活動にも力を入れています。

私が伺った当日は看板犬2匹に加えて、さらに3匹が遊びに来ており、合計5匹のわんちゃんが店内を歩き回っていました。その存在が自然な会話のきっかけとなり、お客さん同士の交流も穏やかに生まれていました。

お店の関水恵子さんによると、「互いに人の温かさ、犬の温かさを知って欲しい」という思いで、このカフェは犬と人が適切な距離を持ちながら共生する社会を目指しているそうです。



犬がつなぐ、人との出会い

私がテラスティピィに取材へ行こうと思ったのは、「わんちゃんがいるカフェ」という珍しさに強く惹かれたからです。普段、犬と触れ合える場所は限られているため、看板犬たちに会えることを楽しみにしていました。

実際に訪れてみると、店内には昔から通っている常連さんや家族連れなど、幅広い年代のお客さんがそれぞれの時間を楽しんでいました。カフェが多くの人に親しまれていることが伝わってきます。

特に印象的だったのは、わんちゃんの存在がきっかけで、お客さん同士が自然に会話を交わしていたことです。横になってのんびりしている子、積極的に遊んでいる子など、それぞれのペースで過ごすわんちゃんの姿に合わせて、お客さんもリラックスして接していました。無理なく人と人がつながる空気が流れており、とても心地よく感じました。

自然と人がつながる不思議なカフェ

取材の数日後、家族と一緒にご飯に行ったとき、ふと「普通のカフェで生まれる距離感とは何かが違うな」と感じました。テラスティピィでの出会いは、もっと深いところでつながるような感覚があり、一度きりでは終わらない“これからも続く関係”が自然と育っていくように思えたのです。

無理に話しかけなくても、気づいたときには人と人が柔らかに結びついている、そんな不思議な心地よさがありました。

関水さんも「これが犬の力ね～」と笑っていました。わんちゃんたちは、ただそこにいるだけで場の空気を和ませ、人と人の距離を縮めてくれます。その存在が生み出す穏やかさや温かさを目の当たりにし、犬の力が人の交流に与える影響を改めて実感しました。



つなげて広げていく世界の輪、 デフリンピック

取材：飯島 咲音

10月19日（日）に開催された「東京2025デフリンピックを藤沢から応援しよう！」に参加してきました。このイベントは手話言語の国際デー in ふじさわ実行委員会が主催しており、デフリンピック選手たちのトークショー、手話体験をすることができました。



イベントが始まる前から多くの方が開会式を並んで待っていました。その中には、手話で会話をしている方が多くいました。みなさんの心待ちにする気持ちが私にも伝わって来ました！

みんなでつながる開会式

いよいよ開会式が始まりました。最初に登壇されたのは議員の方々と、それぞれがデフリンピックへの思いや、未来への希望を熱く語っていました。どの方も共通して口にしていたのが「共生社会を広げよう」という言葉です。私はその言葉を聞いたとき、なんとなく良い言葉だとは思ったものの、正直なところ、深い意味までは理解していませんでした。

そこで後から「共生社会」という言葉を調べてみると、「性別、年齢、障がいの有無、国籍といった個人の属性に関わらず、すべての人が互いの違いを認め合い、尊重し、助け合いながら、自らの意思に基づいて生き方を決め、社会の仕組みづくりに参加できる社会」とありました。その説明を読んだとき、私は胸の中に2つの感情が生まれました。ひとつは、すべての人が対等に生きられる世界への希望。もうひとつは、それを現実のものにするための大きな難しさです。

実際、違いを認め合うというのは言葉で言うほど簡単ではありません。無意識のうちに偏見を持ってしまったり、自分と違う立場の人の気持ちを想像できなかったりすることもあると思います。それでも、デフリンピックのような場で多くの方が「共生社会」を口にすることを聞いて、理想を掲げるだけでなく、少しずつでも行動していくことの大切さを感じました。開会式は、私にとって単なるイベントではなく、「ともに生きる」という言葉の重さと意味を考えるきっかけになりました。

誰でも楽しめるトークショー

トークショーでは、デフリンピック自転車競技選手の早瀬慶太郎さん・早瀬久美さん、そしてスペシャルゲストとして小山慶一郎さんがお話しされていました。会場の雰囲気はとても温かく、選手の方々が普段どのように競技に向き合っているのかを知る貴重な時間になりました。

オリンピックの自転車競技では、ギアの音やペダルの音など、周囲の音から相手との距離を判断します。しかし、デフリンピックの自転車競技ではまったく別の方法で行います。それが“見る”による判断です。

といっても、相手をガッツリ見続けるわけではありません。視界の端に入った一瞬の情報だけで判断するのです。これは単なる「視野が広い」というレベルではなく、鍛え抜かれた選手だからこそできる高度な技術なのだと感じました。

トークショーでは実際に自転車に乗りながら、相手がいつ横にきたかを見極めるゲームが行われていました。観客として見えても、選手の反応の速さと正確さには思わず息をのむほどでした。視野の広さだけでなく、「視界に入った瞬間に判断し動ける能力」は、日々の訓練の積み重ねがあってこそだと改めて感じました。

話を聞きながら、ふと「これも共生社会への確かな一歩なんじゃないか」と思いました。というのも、筆談ではなくリアルタイムで選手の思いを受け取れる環境がしっかりと用意されていたからです。手話通訳者の方々が手話を瞬時に読み取り、場の流れに合わせて、音声でわかりやすく伝える。これは簡単なことではありません。その技術があることで情報の壁がなくなり、会場にいる全員が同じ瞬間を共有できる。こうした積み重ねが、確実に共生社会へとつながっていくのだと感じました。

未来に向けて

神奈川県聴覚障害者連盟の理事長を務める河原雅浩さんにお話を伺いました。河原さんによると「今回のイベントの最終的な目標は、これまで聴覚障がいのある人と関わる機会がほとんどなかった人たちが、体験を通して聴覚障がいへの理解を深め、共生社会の輪を少しずつ広げていくことだ」といいます。

さらに、手話やデフリンピックを多くの人に知ってもらい、より盛り上げていくきっかけにしたいという思いも込められているそうです。

実際に私自身、イベントで手話を使ったコミュニケーションを体験してみて、普段どれだけ“音に頼っているか”を実感しました。同時に、音がなくても人とつながれる温かさや、伝えようとする気持ちの強さにも触れ、これまでの自分の世界が一気に広がったように感じました。相手の表情や手の動き、間合い…そのすべてが「会話」になる体験は今まで見ていなかった景色を見せてくれました。今日得た小さな気づきが、これからの社会を動かす一歩になるのかもしれない。



あの頃は見えなかった景色、 「えとす児童クラブ」で触れた大人の想い

取材：野元 小暖

2025年12月2日（火）、私は天神町にある「えとす児童クラブ」を体験取材しました。「えとす児童クラブ」を含む放課後児童クラブは、共働きなどで放課後や長期休暇の時に、家に大人がいない小学生を対象とし、安心して過ごせる生活の場を提供する施設です。

私も小学生の頃に児童クラブを利用しました。今回の訪問で、利用当時は気づけなかった多くの人の支えや想いがあったことを、改めて知ることができました。

日常を彩る放課後の居場所

私が到着した15時ごろは、子どもたちの学習時間でした。読書をしている子もいれば、学校から出された宿題を、この時間に取り組む子もいました。「学校や塾の宿題はできるだけ児童クラブで済ませてきてほしい」という保護者の声に答える形で、この学習時間を設けているそうです。

一方で、保護者だけでなく子どもたちの声にも応えるため、毎週金曜日は学習時間を設けず、学校から帰宅してすぐに自由時間にしているとお話しされていました。

学習時間が終わると、おやつの時間です。子どもたちは班ごとに食前の準備や食後の片付けを行います。また、この頃になると6時間目を終えた中学年の子どもたちが少しずつクラブにやってきました。上級生が加わることで、児童クラブの雰囲気も徐々に賑やかになっていきます。

放課後に広がる子どもたちの世界

おやつを食べ終え、元気いっぱいの子もたち。待ちに待った自由時間です。外で遊ぶ子、室内で本を読む子、けん玉で遊ぶ子など、それぞれが思い思いにのびのびと過ごしていました。

私は、年賀状作りに取り組む子どもたちと一緒に自由時間を過ごしました。子どもたちは、「いちごミルクみたい」「思ったよりフワフワしていて気持ちいい」と話していました。非日常的な制作活動は好奇心を刺激するようで、豊かな感性に驚かされました。作った年賀状は、両親とおばあちゃんに渡すのだと嬉しそうに教えてくれました。

また、さまざまな子どもたちが話しかけてくれ、好きな本や映画、学校で流行っていることなどを教えてくれました。子どもたちと話していると新しい視点を得られたり、自分の小学生時代を思い出し



たりと、私自身も楽しいひとときになりました。楽しい時間はあっという間に過ぎ、いよいよ帰宅の時間に。子どもたちは保護者のお迎えが来ると順番に帰っていきました。

子どもたちの放課後を支えるスタッフの想い

「子どもたちにとって、えとす児童クラブが第2の家になってほしい。」そう語ってくれたのは、「えとす児童クラブ」のクラブ長である星野さんです。児童クラブは教育施設ではなく、保育施設に近い位置付けになるそうです。だからこそ、「子どもたちがのびのびと自分らしくいられる環境をどのように作っていくかが大切」と話していました。

また、子どもたちが「ワクワク」「ドキドキ」する体験を提供することも重視していると言います。年賀状作りをはじめ、夏休みの親子デイキャンプやクリスマスのケーキ作りなど、さまざまな体験の場を通して、子どもたちの好奇心を育てているそうです。これらは単なる経験にとどまらず、“文化の継承”にもつながっているとのこと。一石二鳥ですね。

振り返ってみると、私自身もけん玉やベーゴマ、メンコや缶ゴマに興味を持つようになったのは、児童クラブのおかげだったと感じます。

そして最後に、星野さんが語ってくれたのは、子どもたちにどのように成長してほしいかという想いでした。

「藤沢市が好きな子に育ててほしい。」

全員でなくてもいい。大人になったときに、ふと「自分たちが育った場所は素敵だったな」と思える子が、1人でも2人でもいてくれたら嬉しい、そう願っているそうです。

故きを温ねて新しきを知る

私も小学生の頃、児童クラブにお世話になっていました。時が経ち、久しぶりに足を運んでみると、懐かしさと同時に、当時は見えなかった「児童クラブの裏側」を知ることができました。授業が終わったあとの私にとっての居場所だったこの場所は、たくさんの大人と子どもがいて初めて成り立っているという“当たり前”に気づかされました。

スタッフの方々の仕事は、決して楽しいことばかりではありません。背景の違う子どもたちと向き合うことは簡単ではなく、悩むことも多いといいます。かくいう私も、決して手のかからないタイプではなく、きっと多くのご苦勞をかけたのだろうなと感じました。

それでも、温かく見守り、支え続けてくれた大人たちがいてくれたからこそ、今の私があるのだと思います。当たり前のことですが、このことにきちんと感謝をしながら生きていきたいです。今回の訪問は、子ども時代には見えていなかった多くの想いに触れる、貴重な経験となりました。



18歳の私が考えた、まちの未来。 「ふじさわ子ども・若者委員会」参加レポート

取材：野元 小暖

子どもや若者が主体となって、まちづくりや政策について話し合う「ふじさわ子ども・若者委員会」。「どんなことをするんだろう？」という好奇心から、この委員会に参加して半年間活動してきました。18歳という「大人と子どもの狭間」で感じたこと、そして活動を通して見えてきたまちの未来についてレポートします。



ふじさわ子ども・若者委員会とは

ふじさわ子ども・若者委員会は、藤沢市が2025年3月に策定した「子ども・若者共育計画」を具体化する取り組みの一つとして誕生しました。計画の実現には、支援される側としてではなく、主体的な担い手である子ども・若者が継続的に参加できる場が必要であるという認識が背景にあります。



委員会には、藤沢に暮らす・学ぶ小学校高学年から大学生（おおむね22歳まで）のメンバーが参加し、まちづくりや子ども・若者施策について学びながら、意見交換や提案を行います。年間を通して定期的に集まり、グループディスカッションを重ねながら、居場所づくり、市の政策、進学や就労など、自分たちの生活に直結するテーマについて話し合います。そこで出たアイデアや課題意識を提言書としてまとめ、市長や関係部局に届けることで、若者の声が政策へ届く仕組みづくりを進めています。この活動を通して、参加者自身がまちをより良くする主役として、藤沢の未来を描いていきます。

「かわせみボイス」を始めました！

また、藤沢市では、2025年の9月から、子ども・若者の声をさらに広く集めるために、「かわせみボイス」というオンラインプラットフォームも運営しています。かわせみボイスは、藤沢市に暮らす・学ぶ小学生から大学生（おおむね22歳まで）の子ども・若者や、子育て中の方を対象に、インターネットを通じて気軽に意見や提案を投稿できる場です。

時間や場所を問わずアクセスでき、日々の生活で感じたこと、学校や地域についてのアイデア、将来の希望や不安など、自由に書き込めます。投稿された内容は、市の担当部署に届けられ、まちづくりや子ども・若者支援の参考にされます。

ふじさわ子ども・若者委員会などのリアルな「場」だけでなく、オンラインでも声をあげられることで、もっと多くの人が参加しやすくなります。

藤沢で暮らし、感じ、考えているあなたの一言が、未来の藤沢をつくる大きな一歩になります。ご興味があれば、ぜひかわせみボイスに登録して、あなたの声を届けてみてください。

半年間の活動内容

今回、私が委員会に参加したきっかけは、「どんなことをするのだろう？」という、ささやかな好奇心からでした。他の参加者の多くも、同じような気持ちで参加したと聞いています。

活動の初回では、藤沢市における子ども・若者の課題を整理し、「居場所づくり」「ライフデザイン」「政策」の3つのテーマに分けて議論を進めました。参加者はそれぞれ関心のあるテーマのチームに所属し、付箋を用いたグループディスカッションを通して、市の現状や課題を洗い出し、目標達成に向けてどのような提案ができるのかを検討しました。

活動はおおむね月に1回のペースで行われ、各チームが11月3日に行われた「こどもまんなかアクション」リレーシンポジウム in 藤沢における政策提言発表に向けて準備を進めていました。私自身は参加できた回数こそ多くはありませんでしたが、各チームが一丸となって発表に向けて議論を重ね、形にしていく過程を共有できたことは、大きな刺激となりました。

藤沢市のこれから

「子どもや若者の意見を政策に反映していくことは、若い世代だけでなく、大人にとっても大きな学びになる」と、市の担当者は話します。大人が子ども・若者のことを思い、「きっとこれが良いはず」と考えてつくった施策でも、実際には子どもたちのニーズとずれてしまう可能性があります。だからこそ、当事者の声を直接聞くことが重要だと言います。

1回目の委員会では、参加者の年齢層に偏りがあったことや、日程調整の難しさなど、運営面での課題も見えてきたそうです。市では今後、複数のチームに分かれて活動する体制や、より幅広い年齢層が参加しやすくなる仕組みをつくりたいと考えています。多様な視点を持つ子ども・若者が集まることで、よりリアルで精度の高い声を政策へつなげられるようになります。

半年間を走り抜けて、18歳の私が考えたこと

子どもは生まれながらにして、人間としての尊厳と、幸せに生きるための基本的な権利を持っています。（子どもの権利条約より引用）

近年では、子どもは「弱く守られる存在」という一方向の関係ではなく、一人の主体として尊重する考え方が重視されるようになってきました。

今回の委員会を通して、そのような価値観の転換を行政だけに委ねるのではなく、市民である私たち自身が関心を持ち、共に進めていく姿勢が必要だと強く感じました。

また、18歳という年齢は「子ども」と「大人」の狭間に立つ特別な時期です。法律上は成人として社会参加が期待される一方で、経済的・社会的な自立がまだ十分ではない人も多く、学校などの場面では「子ども」として扱われることもあります。この時期に、多様な価値観に触れ、自分の考え方を柔軟に見直す機会を得られたことは大きな意味がありました。

いずれ迎える「大人」としての未来。そのときには、現在の市役所の方々のように、さまざまな意見を尊重できる強さと優しさを持った大人でありたいと、そう思わせてくれる経験になりました。

今回のクラウドファンディングでは、総勢41名もの方々から温かいご支援をいただきました。

ここに、多大なるお力添えをいただいた皆様のお名前を掲載させていただきます。

「ふじさわこたね」の背中を押してくださったすべての皆様へ、心からの感謝を込めて。

Thank you!

株式会社ハビリスデザイン 代表取締役 深見勝弘 様

株式会社まこじろう福祉事務所 様

伊藤 智子 様

岩田 みち子 様

大郷 和成 様

大原 照恵 様

小木曾 まこ 様

小林 博 様

佐野 将之 様

島村 孝子 様

天明 美穂 様

一杉 好一 様

ヒラサワ タカシ 様

松村 正承 様

丸山 康彦 様

宮川 史生 様

安江 諒平 様

吉田 朗 様

(法人・個人別／五十音順)

第2期「ふじさわこたね」始動！ 学生記者&取材受け入れ先を大募集

学生が藤沢の福祉に出会い、自分の言葉で発信する「ふじさわこたね」。

第2期がスタートします。

第2期の新構想

取材を通して、まちの福祉をつなぐ！



今期からは、事前に地域の皆様から「取材候補先」を募ります。

学生が実際にその場所へ足を運び、体験・取材をすることで、ふじさわこたねをともに育む輪に加わっていただく新しい仕組みです。学生が動けば動くほど、共感の輪が広がるだけでなく、分野や世代の垣根を越えて地域の活動が結びつき、まちに「重層的なつながり」が生まれていきます！

学生の体験取材に協力してくれた場所や団体を『こたねパートナー』と呼んでいます！

パートナー同士が情報交換できるような、横のつながりもこれからどんどん作っていきます

① 取材候補先のエントリー（自薦・他薦どちらも歓迎！）

学生の取材を受け入れてくださる現場を募集します。

「うちに来て！（自薦）」「あそこ面白いよ！（他薦）」どちらも大歓迎！

たとえば…

福祉施設や子ども食堂、地域の福祉につながるイベントなど。

みなさんの多角的なアイデアをお借りしたいです。

※他薦の場合は、事務局から該当団体様へ事前にご相談します。

なお、自薦・他薦含め、全ての候補先に行けるわけではありません。

エントリーを
お待ちしております

② 学生記者（第2期生）のエントリー

まちへ飛び出し、発信してみたい学生を募集します！

事前に集まった「取材候補リスト」から行き先を選び、現場体験&取材をして記事を書きます。

経験不問。まちの福祉と出会いたい方、文章での表現にチャレンジしたい方、ぜひご応募ください！

エントリー方法

つつく

福祉を「福祉の世界」だけに閉じ込めない。
社会の壁にアナをあける一步を、ともに作りましょう。

参加窓口はこちら ※最新の募集スケジュールはWEBサイトをご確認ください

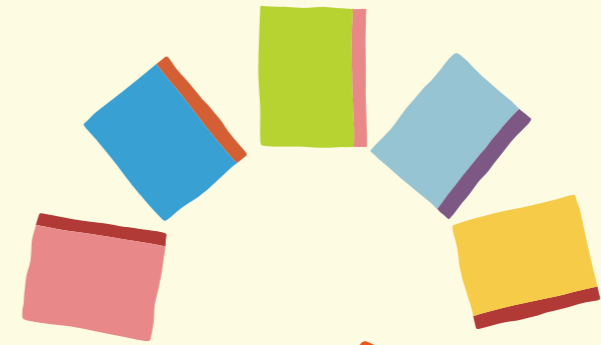
- ① 学生を受け入れる
(取材候補先への自薦・他薦)
- ② 自分の言葉で発信する
(学生記者へのエントリー)
- ③ 寄付・協賛で活動を支える
(サポーター支援)



またね思い出アルバム



2025-2026



1年目のあゆみ
ふじさわこたね

発行 障がいのアナ

